● 北　陸

山　田　正　幸

2020年２月末から，コロナ禍に見舞われもう丸３年になろうとしている。政府がコロナ対策をいつ緩和するのかが重要な議題だ。2023年を迎えてサッカーも野球も全面的に観客を入れると言う。あとはマスクを如何にするか！だろう。その中で北陸の2022年の音楽界はどうしてきたのだろうか？幸いに北陸地区では公演中止というものは殆どなかった。ウィズコロナで乗り切った公演が多いのだ。

福井県

「ハーモニーホールふくい」では主催公演20回を数えたが中止は無かった。だが唯一海外オーケストラを招聘する予定が来日中止になったので，すかさず国内オーケストラに切り替えて実施，流石の対応をする。ホール設立25周年記念公演では新作ミュージカル「雪の女王」公演の成功が白眉。語り手等に鶴見辰吾，雪の女王に元宝塚のスター水夏希を迎え，厳しいオーディションで選ばれたキャストや県民から合唱とダンスで60人が出演。越のルビーアーティスト達と県産楽器ハープとマリンバ，そしてこのホール自慢のパイプオルガンと共に生演奏で盛り上がったのである。日本海の恵みを受ける福井県ならではの発想が際立った。

そして平和への讃歌を歌う「ベートーヴェンの第九」公演は県民の，県民による，県民のためのもので100名の合唱団，福井交響楽団の出演で地に足の着いた現在持てる“ふくいの力”を存分に発揮した公演と言えるであろう。

パレア若狭は住民参加型でミュージカルの名作「サウンド　オブ　ミュージック」に取り組み，なびあす美浜ではピアノの名器ファツィオリを使って「ピアノってすばらしい」とピアノを中心とした室内楽を愉しんだ。各ホールが持ち味を出した公演である。

富山県

オーバードホールではコロナ禍も見据えたか？本格的なオペラ公演はせず、「劇場が結ぶ，本と音楽の世界」をテーマとした公演を３回行った。作家：宮下奈都×ピアノ：金子三勇士，作家：平野啓一郎×ギター：大萩康司，作家：林真理子×歌手：小林沙羅，望月哲也の組み合わせである。

文学と音楽の新たな魅力を語り演奏するひと時なのである。この憂鬱な時代に上手く内面を引き出し新しいファンの開拓に繋がった公演である。勿論バレエ公演，オーケストラ公演も行いながら，一層のファン開拓への道を探ったのである。

「TAKAOKA 未来クリエーション」を掲げた高岡市民文化振興事業団は「10歳のファーストコンサート」に決意を感じる。市内の４年生全員をホールに集めてオーケストラ鑑賞を続けている。2020年度にはコロナ禍で中止したが，21年度は５年生を加えた全2600人に対し，５公演実施した。今やもう30年に及んでいるのである。この潔癖とも言える姿勢は本年の「みんなで歌おう1000人の高岡第九」に繋がって結実している。

石川県

実行委員会形式の「風と緑の楽都音楽祭」では，コロナ禍を充分警戒しながらも殆ど計画通り進めた。来日出来なかった海外のオーケストラの代役には急遽「京都市響」「セントラル愛知」が駆けつけた。予定の「東京交響楽団」地元「オーケストラ・アンサンブル金沢」（以下OEK）と４つの国内オーケストラが一堂に会したのである。コロナも粋で味な事をもたらしたものである。曲目も一切変更なしでの国内オーケストラの競演は真に日本オーケストラ界の充実ぶりを感じさせた。また計画は180公演だったが野外やストリート公演など10公演のみ中止。有料66，無料104の計170公演を実施し，金沢を中心とした北陸三県のゴールデンウィークを音楽一色に染めたのである。

OEKを有する石川県立音楽堂では邦楽監督として２年目を迎えた狂言師「野村萬斎」が「萬斎のおもちゃ箱」と称して，指揮井上道義によるOEKの「ボレロ」で舞った。満員の観客はその優美さに酔った。そしてOEKのアーティスティック・リーダーとして９月に就任した広上淳一は，故・岩城宏之生誕90年公演にこの年の岩城音楽賞に輝くソプラノ竹多倫子を迎え，ヴェルディやワーグナーのアリアと共に尾高惇忠/音の旅やモーツァルト/交響曲第36番を披露した。この選曲は広上淳一の幅広さと共に柔軟な思考に依るものであった。

彼は常にホールを満席にし，多くの観客に音楽の喜びを感じて欲しいとコロナ禍で減じたファン獲得の為に金沢駅やホール前で自らチラシ配り，呼びこみをしている。その姿はコロナで閉鎖した社会を“普通”に戻したいという熱意と執念を感じさせる。